

“Vier mathematische Abhandlungen” (東京, 1907) のほかに, “京都大学紀要” を忘れてはならないだろう. この期間の京大紀要には次の人々の数学論文が載っている.

河合十太郎 (1) 三輪桓一郎 (1)
吉川 實夫 (1) 和田 健雄 (2)
西内 貞吉 (1)

しかし, ごく大体から見れば, この 1907~1910 年の期間においては, 数学の国際的発表機関といえば, 本会記事の外にはなかつた, といつても, たいした言い過ぎではないだろう. そこに現われたのが, 1911年における東北数学雑誌の刊行であつた.

もう一つ記憶に残るのは, そのころ行われた本

会の通俗講演のことである. もつともこれは物理方面の話が多かつたが, ただ一つの異例として, 私が入会した 1907 年の 12 月 5 日に, ‘関先生二百年記念講演会’ というのが, 神田一ツ橋の高等商業学校大講堂で開かれた. 藤澤さんの座長で, 菊池大麓さん, 狩野亨吉さん, 林鶴一さんの講演があり, 聴講無料のためか, 非常な盛会であつた.

こんなことを回想しながら, また一方で, 東京数学会社創立 80 周年の今年こそは, 和文最初の西洋数学書柳河春三の“洋算用法”(1857) 刊行の 100 周年に当ることなどを思い浮べると, いまさらながらわが国における数学の歩みについて, 深く反省せずにはおられなくなる. (1957. 7. 26)

数 学 会 の 思 い 出

辻 正 次

もう 30 何年も昔のことであるが, しかし何だか昨日の様にも思えて, 年月のたつことの早いのを痛感する次第であります. その頃は物理と一緒に, 日本数学物理学会といつて, 年会も物理と一緒に, 旧理科大学の大講堂 (これは震災の時取りこわした) で開かれ, 数学の講演もごく小敷で大部分物理の講演であつた. 長岡先生が一番前の席に居て, 物理の講演に対して, 盛んに辛辣な批評を下して居られたのを記憶している. 後に数学が物理から分離して, 年会の講演を開く様になつたが, しかし講演数も少く, たしか 20 を越えなかつたようで, 代数も幾何も全部同じ室で講演も一日ですんでしまつた. 其頃は証明も全部黒板でやつたものである.

それから通俗講演が時々開かれ, 旧理科大学の大講堂で夜間に開催された. 学生の頃, 吉江先生の集合論の概要をきいた.

中村先生だつたか, 寺澤先生だつたかの提案で, 外国の雑誌の論文を証明もつけて邦文で出版する計画が実行され, 大変便利であつたが, いつの頃からか消えてなくなつたが, も一度復活してほしいものである.

これは数学会とは関係のないことであるが, 日本数学輯報の編集に多年関係した. これは数学以外他の自然科学の各分野に夫々輯報があり, 日本の学界の主な論文はこれに集中するという方針で医科などは全部これに主な論文を集中していたようである. 吉江先生が Chairman で, その下で御手伝いしたのであるが, 吉江先生は一々原稿の外国文の間違いをなおして, これはヒドイ独乙語だとこぼしておられた. 数学会の Journal が出るようになり, これに主な論文がのるようになって, 輯報の影が薄らいだようであるが, 永年関係した雑誌なので何か郷愁を感じる次第です.

入 会 当 時 の 想 い 出

末 綱 恕 一

数学会は此頃随分盛大になつて, 日本の数学の隆盛を示すものと, まことに慶賀に堪えない. 終

戦前までは数学物理学会の一部であつたが, 私が入会したのは関東大震災の前年で, 35 年前 (1922